

Title	考古學研究, 東京大學文學部考古學研究室, 第一冊 遼陽發見の漢代墳墓(駒井和愛), 第二冊 曲阜魯城の遺蹟(駒井和愛)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.25, No.3 (1952.) ,p.168(423)- 172(427)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520000-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を見ることが出来る。全體で三五〇頁あまり、詳細な引用書目と索引が附せられた本書に對して専門家でない筆者は充分な論評を加へる資格はなく、たゞ美事な史的研究所と綜合の手腕に打たれるばかりであるが、絶對主義最盛期のヨーロッパを理解する好著として推賞したい。

(平山 榮一)

考古學研究

東京大學文學部考古學研究室

第一冊 遼陽發見の漢代古墓(駒井和愛)

第二冊 曲阜魯城の遺蹟 (駒井和愛)

今次の大戦は洵に不幸な出來事ではあつたけれども、そのたゞ中に幾多の危険困難を冒して東亞の古代文化を闡明しようとする努力した我國考古學者の業績は認められて然るべきものと思ふ。その成果には見るべきものが多々存するけれども、大部分は今なお打ち續く出版事情の悪化に災されて未發表に終つてゐることは遺憾に堪えない。今幸い駒井和愛氏の勞作として表記二冊の報告書が刊行されたことは我々の深く感謝すべき出來事であり、些か世界の學界に對して肩身の廣くなる思いを感ずるのは筆者のみに限らぬであろう。駒井氏の發刊の辭によればこの報告書はなお續刊を予定されているらしいから一層優れた成果が示されることを大いに期待する次第である。

さて早速内容の紹介に移るが第一冊は昭和十六、十七、十九年に前後三回に亘つて實施された遼陽縣城南門外の石槨並に瓦棺及び城北、城西の石槨並に磚槨(第一回)、縣城南林子と玉皇廟に於ける壁畫を有する石槨二基(第二回)、城北北園の林産化學工業會社内に發見された壁畫を有する石槨(第三回)の調査報告であり、卷末に琿春縣半拉城發見の渤海國時代の佛像の研究が附されてゐる。

石槨墳六基は頁岩の切石を用い、整然と築かれ主室の外に數個の副室と廊下を有してゐる。特に第六號(林産化學工業會社内發見)には壁畫が明瞭に残存してゐた。

磚槨墳は特記すべき點に乏しいが、床面は網代に、側壁は横積と從積を混用する點が共通してゐる。また多數の瓦器を置く棚の設けがあつた點が注目される。五基が調査されてゐる。

瓦棺とされたものは水平に長大な甕を用いた一種の合口甕棺で、甕は長さ約八尺、口徑一尺二寸を計り、繩蓆文を施し、鎧戸文とも云うべき凹凸文を有するもので秦漢時代と推測される。漢代に於てかような合口甕棺の一種が駒井氏の推測したように廣く行われたとするならば、我彌生文化の甕棺の出自を考える上に、從來より一層大陸との關係を重視する必要を生じ、ひいては彌生文化の研究に新たな面を拓くものとも云うことが出來よう。

やゝ順序が亂れたが遼陽附近の古墳墓とその壁畫は從來も發見

例があつたがその年代には漢代とするものと豎句麗に比定するものとの二説があつた。今回南林子の石槨から「大泉五十」が発見され、前説の正しいことが證明された。最もよく保存された北園の石槨墳に見得るものは、入口に向う柱石楣石に残された雲氣と雲中君、雷公と覺しき怪物、牆壁の文官、武人、馬車の行列、廊下、側室の壁に畫かれた樓閣、住宅、倉庫、人物などであつた。

圖版第十、十一に載出された騎馬及馬車の圖の如き筆勢、構圖の妙、まさに畫面躍動の趣があり、更に重要な事實は廊下の壁面に表された屋上に鳳凰の裝飾を有する三層樓閣の下層の柱に轉びが描寫されていること、及その庭前で弄丸、弄劍、倒立、空中弓射等の雜伎が演ぜられている様を畫していることである。これらの點は漢代文化研究にどれほど貢獻することであるか。その筆致はかの著名な營城子古墳を凌ぎ、一方高句麗古墓の壁畫に親近の關係を有する點もまた看過し難いであろう。他方畫象名との關係も明かに認め得る點も重要である。

遺物としては大部分が瓦製明器でしかも破片であるが、その種類は甚だ多く、貴重な遺品も乏しくない。その種類は、家、門、井、竈、鼎、盃、豆、案、匏、勺、杯、盤、俎、壺、簋、奩、燭臺、博山炉、家畜、其他など二〇種を算える。次に問題となるべき點を摘記すると家には鴟尾の祖形と見るべきものが見られ、軒に瓦瑣をつけた例もある。門も又面白い遺品で美事な獸面を附し

たものがある點も重要である。井は類例は存するものゝ珍らしい遺物の一つであつて底に釣瓶が表わされているなど明器の性質にある種の基準を與え得る遺品と云えまいか。カマドには數種あるらしいがその中に長い煙突を附したものがあり、駒井氏は畫象石の中に同形の描寫が見られると説いている。また魚を陰刻したものが見られる。案にもまた魚を表わした例があるのは面白く、俎には魚形が陰刻されたものが特に多くあつて、中には力を併て表現した一例など、何か微笑ましい感がする。その他漆器の奩を模したらしいものもあるし、盤の一種で恰も我前方後圓墳の平面を見るような形狀を呈し、三脚を附し、底に二羽の鳥形、長方形の透孔を有する遺品がある。駒井氏は後者は營城子古墳出土品と同じ透孔のある類例が見られ、これを氷を盛る器と斷ぜられた。また箱の身の如きものに板をのせた形を呈し四周に欄干があり、上板の中央に大きな穴、四隅に小穴を穿つた一類が、南林子と北園の石槨から出ている。駒井氏はこれを禮記の郊特性、その鄭注、白虎通の五祀の條などを引き「中霤」に比定し、漢代の明器と五祀の關係を強調して居られる。

結論に於いては駒井氏は (一)遼陽縣城を中心とする漢墓群を以てこの地を入口の遼東郡襄平の舊址と推定し、(二)石槨、埴槨兩形式の墳墓に時代の前後は認められぬと云い、(三)瓦棺必ずしも小兒用に非ず、しかも流用の品ではないと説き、その薄葬に基くもの

であつて、時代は若干前二者よりも遡るとした。なお出土人骨は鈴木尙氏の研究が未了であるとのことである。

附載「渤海の佛像」はやはり駒井氏の執筆であつて、ききに觸れたように半拉城出土の二佛坐像を論じたものであり、同城が東京龍原府址に比定され、しかも上京龍泉府舊址からその形式の佛像が発見されないので、渤海の佛像を二期に分ち龍原府式を古く、龍泉府式を後期とした。又その竣立する二佛は釋迦と多寶であり、法華經信仰の既に存したことを推し、且つこの前期龍原府式のものに北魏、飛鳥の佛像の共通點があり、高句麗の石佛に最も近縁關係があるものと論じて居られる。

第二冊「曲阜魯城の遺蹟」は今日山東省曲阜縣城の郊外洙水の流れに挟まれた平野中に残る大規模な土城がその名の如く前漢代に魯の恭王餘によつて建てられ絢爛を誇つた靈光殿の遺址であることを明らかにした調査の概要を論述したものである。曲阜と孔子の名はあまりにも高く、靈光殿はまた後漢王延壽の魯靈光殿賦によつて著名であるが、今日の考古學がその遺址を明かにしたことはまことに誇るべき發見と云わねばならない。調査は昭和十七、十八年の兩度に亘つて行われた。

この大土城は基底の巾五〇米、高さ十米、頂上の巾七米ほどの大規模なもので二十—三十糎の厚さに土を積み、板で固めつゝ築成したいわゆる版築の法で築かれ、南西の一部には今日の縣城が

築かれて一部破壊されているが、東壁が二・五糎、北壁三・五糎に及びぼゞ方形を呈していたらしい。周圍は幅員九六米に及ぶ濠をめぐらしていたと思われ、門は東壁に一、南壁に二が確認されている。今日残る孔家が舊位置を占めるものとするれば孔子自身は當時城内西南隅に住んだことになるという。

土城の中央には高さ十米、東西七百米、南北四百米の土台がある。中央に道路が附され、それを東西に二分しているが、西部には今周公廟が建つている。この土台の上に漢代の殿堂が大規模に營まれていたのである。

土台東部に於いて發掘によつて發見された殿址は無文磚を六枚、茲べその北側に圓い突起のついた方磚二枚を敷き、その端を磚でつくつた狭い溝で固めた巾三米程の廊下の如き構築物が東方に一・二米、西方に二七米の間残存したにすぎないが、廊下の南端西側に直徑五十一—六十糎の礎石が五ヶ一・九米の等間隔で竝んでいること、數ヶ所に無文方磚を敷き、その下に土管の列が見出され、立派な排水設備を有したこと、上記廊下の下二十四糎に別な圓形突起を有する磚の敷かれた部分が見出され、建物が改築されたことを明示していることなどが注意されるのである。またこの廊下様構築物の南三十米の地點にぼゞ相似た構築と礎石が発見され、こゝに前者を北邊これを南邊とする一大建築物が想定されるに至つたのである。

次いで驚くべきことには右の構築物の一部から石灰岩の畫象石の一種が発見され、これに「魯六年九月所造北陛」の九字が判讀されたことである。この石は西方の同種の石と相對し、その間に前記の廊下様構造が見られたのであるが、注意して調査するとその下層に敷かれ、有文磚を伴う圓形突起がある磚が兩側に接して並び、兩者の同時代であることを明示して居り、かくてこの營殿の最初の造營が魯六年、即ち前漢景帝の時代に當り、景帝の子魯の恭王が靈光殿を造つたとする古書の記載と合致し、まさしく一四九九年に建てられた靈光殿址がこゝに確認されたのである。極東に於ては恐らく斯種遺蹟の最初の発見であり、驚へべき事實と云わねばならない。たゞ比較的よく残存した廊下狀遺構はこれを改築した後漢のものであらうといわれる。

出土遺物にもまた見るべきものが多い。

(1) 磚、磚には後漢と覺しき灰色無文のものが最も多く、雷文、雷文と方形文を交互に配したものと、四葉文を陽刻したものと等の有文磚は下層にあつて前漢の遺物であらう。圓形突起を有するものには二種あり、短い方柱狀を呈するものが下層にあり、同種の方磚は上層に見られたから前者が前漢後者が後漢の遺物と推定された。

(2) 漢代瓦璫

文様は蕨平文が大部分でこれに四種ある。また珍らしいも

のとしては中央に樹木らしきものを置き、左右に鹿に乗つた人物を現わしたものがあつた。なお發掘品ではないが粘板岩製の瓦璫文型があり、瓦璫の製作に石型を利用したことが知られる。

(3) 漢代以前の瓦磚

龍文を表わした磚で先秦時代の鏡背文様に類似したものを駒井氏は孔子在世時代の宮殿に用いられたものと推定した。また所謂蟬文を附した一種の釘隠しも漢代以前と説き、圖示した半瓦璫三ヶを戰國時代に比定された。

(4) 漢代以後の瓦磚

後代の瓦磚もまた少くない。特に注意されるのは唐草文軒平瓦璫である。拓影によると十分明かでないが木型によつたかと思われ、法隆寺のある種のものに近似する様に見える。また單瓣の軒丸瓦璫も六ヶ圖示されて居り、その一は大阪府高井國寺址から出土したものと近似すると駒井氏が説いて居り、更に一層優れた尤品は我白鳳瓦を見る趣がある。往年中國に蓮華文軒丸瓦璫が少いと聞いていたが、南京に赴いて案外目に觸れることの多いのに驚いたことであつたが、かように我國出土品と相近いものを見ることが出來たのは興味深いことと云わねばならない。

(5) その他先秦時代の遺物として貝貨、貝製品、蟻鼻錢などが

擧げられ、灰色繩蓆文尖底土器、無文高杯豆、鬲、鼎などの土器片があり、五銖、貨泉、大泉五十なども見られる。なお後代の遺物も多いが、こゝでは省略することとする。

上記の如く本書は魯の舊城址を推定し、前漢の靈光殿址を發見するといふ稀に見る成果を録したものであり、まことに貴重な報告書と云うべきである。第一冊と共に國版の鮮明な點は嬉しいことである。たゞその調査が甚だ小部分に止つてゐるのは如何にも残念であり、記述も簡でやゝ理解し難い點のあるのは遺憾であるが、これも今日では止むを得ざる所である。トロヤ、ミノスなどゝは比較にならぬとしても、中國に於いてもかような古い都市の調査が可能であることを示しただけでも比類少き成果であり、驚異に値する事實であろう。河北省邯鄲には趙の、易縣には燕の土城が残存しているということであり、今後どの様な發見がなされるか期待されるのであるが、恐らくなお時を要するのではないかと思われるのは残念である。

なお卷末に「中國西北ホリソングルの漢成樂縣址」という附録が附されて居り、綏遠南方約五十軒に残る大土城が調査の結果漢の成樂縣址、北魏の盛樂、遼の振武縣址と認むべき三ヶの土城から成つてゐることが論ぜられてゐる。

長々と駄文を弄したがこの二冊の研究報告書が有する意義は一應盡し得たかと思う。東亞考古學に暗い筆者としてはこれを評す

ることも出来かねるので、紹介として記述を試みたのであるが、未だ入手閲讀の機を得ない方々に何等かの参考ともなれば幸いである。(清水 潤三)

東方學

東方學會

第一輯

昭和二十六年三月

第二輯

昭和二十六年八月

我が國の人文科學の中で、世界的水準を抜くものとして、東洋學がよく擧げられる。されば海外の學者が東洋のことを研究する場合に、我が東洋學の成果を参照せずしては先づ不可能に近いと言つて過言であるまい。故にかゝる成果の發表機關たる我が東洋學關係雜誌は獨り國內のみならず、外國にまで重きをなしてゐるのである。

しかし今次の戦争の結果はなべて學術雜誌の出版を困難ならしめたが、特に東洋への關心が一般に薄らいだことは愈々東洋學關係諸雜誌の刊行に打撃を與へた。かくて戦前永き傳統を有した「支那學」、「東方學報」東京、「東亞經濟研究」等を始め、多くの雜誌が廢刊の憂目を見たのである。幸ひ、「東洋學報」、「東洋史研究」、「東方學報」京都等は戦後に復刊したが、何れも停刊、遲刊などで、未だ到底、戦前の如き隆盛の域には達してゐない。